

ぼくのノオト

②8 月光の若茶良

那覇で開かれた乳幼児精神保健学会。その空き時間、上り坂をへろへろになって走り、三年ぶりの首里城を散策した。

大火の恐怖や日常をなくした喪失感を、すぐにでも払拭したいと思う人の気持ちは理解できる。しかしまだ鎮火していないうちから、復元を話題にしていたテレビには閉口した。形だけを元に戻すことに、どんな意味があるのだろうか。

久米島の按司（首長）若茶良は、島人の上に輝く太陽ではなく、暗い足元を照らす月でありたいと志した。その月光の按司・若茶良は、首里の強力な大軍から島を守ることができなかった。小さな島からみる首里城には、語られない影の一面もある。そんな島の歴史を、久米島の中高校生たちは、組踊の舞台で伝え続けている。

災害を記憶にとどめ、教訓を語り継ぎ、これからどうしていくのかをじっくり話し合うこと。それは復興の速さや国土強靱化を声高に唱えるより重要なはずだ。それが人災であるならなおさらだ。



認定NPO法人 いわき放射能市民測定室

たらちねクリニック

院長 藤田 操